

## ポスターセッション

第1日目／第9-3会場／14:40~15:20

◎福祉機器

座長 荒巻 駿三

## I-9P3-7 頸髄損傷例における介助犬の有用性

北海道大学大学院医学研究科リハビリテーション医学

土田 隆政, 真野 行生

**【目的】**近年、介助犬はマスコミに度々取り扱われるようになり、第38回日本リハビリテーション医学学術集会ではワークショップが行われた。今回演者らは頸髄損傷2症例について、介助犬の導入前後で訪問調査する機会を得たため、その結果を報告し、介助犬の有用性について検討する。

**【対象】**症例は34歳(症例1)と37歳(症例2)の男性で、介助犬導入前および導入後6カ月と12カ月の時点での訪問調査した。症例1の残存機能レベルはZancolli分類のC6B2で、床からの移乗が困難な以外、ADLはほぼ自立していた(Barthel Index 80点)。症例2は同分類のC6Aで、基本動作すべてが要介助で、食事動作のみ自立していた(Barthel Index 30点)。独居生活のため24時間ヘルパーを導入していた。

**【結果】**介助犬は小物の拾い上げや運搬、冷蔵庫からの飲用ボトルの口渡し、ボタンスイッチの操作、ヘルパーへの連絡、ドアや窓の開閉、狭い場所での車椅子の駆動や車輪が転がりにくい床面でのアシスト、下肢スパズムの抑制などを行っていた。介助犬の導入により犬の世話をする必要上、症例の日常生活での身体活動量は増加した。また、第3者への介助依頼の頻度は減少した。症例2では短時間の独居が可能となり、夜間の身体拘束が不要となった。日常生活での些細なアクシデントを介助犬が支援するため、生活および仕事の効率や快適さが向上した。

**【結論】**介助犬は頸髄損傷例のQOLを向上する手段として有用である。

## I-9P3-8 リフト使用時と非使用時における要介護者および介護者の印象について

国際医療福祉大学大学院

田中 繁

一般演題

5月9日

**【目的】**福祉用具は介護保険の実施と共に、利用者はますます増えている。しかし、それが適切に選択されているか、利用者にとって満足できるものなのかについては十分議論されてはいない。福祉用具の価値を知るためには、機能的な役割のみでなく、その結果得られる満足度などを客観的に知る必要がある。この研究では特にリフトに焦点を当て、利用者の印象を調べたので報告する。

**【方法】**対象は日常的にリフトを利用している障害者あるいは要介護者本人および介護者で、各8名であった。調査は直接面談による方法で行った。対象者には調査前に、通常使っているリフトにより入浴などのADLを模擬的に実施してもらい、同時に作業療法士の指示の下でリフトを使わない方法で同一のADLを行ってもらった。そして、2つのADL実施結果の印象の相違について、調査票に従い回答を得た。調査項目は“危険なー安全な、疲れるー疲れない”など10個の形容詞対をそれぞれ5段階に区切り印象の段階を答える、評定尺度法により構成した。

**【結果】**全体的にリフト使用時が望ましいという回答を得た。例えば、リフト使用時の方が非使用時に比べ“良いー悪い”では、要介護者に関して全員が5(良い)と回答していた。比較的評価の低かった項目としては、介護者から見て使用者が“痛いー痛くない”まで、8人中6名で評点が4以下であった。それ以外では、高い評点であった。

**【検討】**対象者は十分でないが、リフトに関する印象の評価が系統的に得られた。今後は、福祉用具の評価として、費用効果比などの客観的な指標へ結びつける手順の開発が必要と考える。

## I-9P3-9 微生物分解型トイレ(バイオトイレ)の現状と今後の課題

長崎大学医学部附属病院理学療法部

原田 真一

**【はじめに】**現在使用されているポータブルトイレは使用の度にし尿の廃棄と便槽の洗浄が必要であるオマル方式が主流である。そのため看護婦や介護にあたるひとは大きな時間的労力と精神的な苦痛を強いられているのが現状である。ところが近年になりおが屑などの中の微生物を利用してし尿を分解する微生物分解型トイレ(以下バイオトイレと略す)が出現してきた。これは家庭用に普及し始めた生ゴミ処理機と同様の原理のもので、おが屑やチップをし尿と共に一定の環境下で攪拌し最終的には炭酸ガスと窒素と水に分解させるものである。**【目的】**現在市販されているバイオトイレの利点と欠点を検討すること。**【対象】**現在市販されている3機種を対象とした。**【方法】**実際の機種の機能と機構を比較検討した。**【結果】**バイオトイレにより汚物処理にあたるひとの時間的労力と精神的苦痛は大きく軽減される。欠点としては1. 消臭のための排気ダクトが必要で設置位置が制限される機種があった。2. 各種装置が必要なため従来の商品よりやや高価であった。3. 攪拌用モーターと温度維持用ヒーターに使用する電気代やおが屑やチップの交換などのため多少の維持費が必要であった。**【考察】**バイオトイレは現時点では多少の改良の余地があるが介護にあたるひとの負担の軽減は大きく、今後改良によりその有用性が高まればさらに需要が増大すると考えた。